男性的人生論

立原正秋

潮出版社

男性的人生論

昭和 47 年 11 月 15 日　印　刷
昭和 47 年 11 月 20 日　発　行

定価 680 円

著　者　立　原　正　秋
発行者　碓　井　昭　雄

東京都新宿区南元町 14—1
発行所　株式会社　潮　出　版　社
電話 (357) 7111(代)振替東京61090
〒 160

印刷・製本　中央精版

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© M. Tachihara 1972 Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

男性的人生論　目次

傍観者になれない人生　7
男の勁さとは何か　21
男の自制心について　35
指導者の在り方　48
勇気の容（かたち）　63
遊びのさまざま　79
放任と制約　93

左手の発想 107
文化とは何か 122
父親の肖像 138
公正の在り方 154
酒の飲み方 170
スペインでの発想 188
あとがき 195

装幀　池田浩彰

男性的人生論

傍観者になれない人生

はじめに断わっておくが、この一文は、世を慨嘆するために書かれる文ではない。私には思想とよべるほどの観念形態もないし、ましてや、思想に殉じる、などの如き行動もとれない。これは感想文である。あるいは随筆である。まずこの事を記憶にとどめておいてもらいたい。

男一匹。俺は男だ。男なら起ちあがれ。こんな言葉を私は実にたくさんきいてきた。男のまずしさを表現している言葉にしか思えない。男が、俺は男だ！　とさけんでみたところで、そこからはなにもはじまりはしない。その男が、鋼鉄にもひとしき魔羅を具備しているのなら、なにも事立てて、俺は男だ！　とさけぶ必要はないわけである。したがって私がここで男性的人生論などのごときつまらない一文を草するのは、更におかしな事だが、これは編集部の案である。それだけ現代社会から男性がすくなくなった証左だろうか。こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の一文は、いちおう連載のかたちをとるが、数回で終りになるかも知れない。そして、たぶん、つまらない感想文になるだろうから、俺は男だ！　と自己を信じきっている男は、読まれるのをここでおやめになられた方がよい。

むかし、明の儒者に王陽明という人がいた。俗間伝えられる知行合一の思想の先祖と看做されている人である。知行合一は格物致知とも称されているが、私にはよく解らない。知る心と行なう心に二心はない、という思想だろうか。心即理は実践主義である。最近この思想を実践した人がわが国にいたそうだが、これも私にはよく解らない。わが国でこの陽明学を信奉した人に、熊沢蕃山、中江藤樹、佐藤一斎、大塩中斎などがいるが、史書による実践主義者として私の記憶にあるのは、天保の飢饉の救済にたちあがり、蔵書を売って窮民を救い、兵を挙げ、敗れて焚死した大塩中斎である。この人は英雄ではなかった。自ら英雄たらんとしたこともなかった人であった。ましてや自己顕示欲などまったくなかった男であった。大阪町奉行所の与力として三十八歳まで勤め、その後、隠居しながら、しかし自ら歩む道に傍観者になれなかった男であった。彼の挙兵と焚死はまさしく無償の行為であった。彼の焚死は、似て非なる死ではなかった。

大塩中斎が暴動をおこした原因について、もろもろの史学者が臆測しているが、私が調

り、その原因は、天保の飢饉である。天保四年、出羽に洪水があり、それが影響では白米が百文で四合しか買えなかった。文政の頃は百文で三升買えたのだから、な騰貴である。ところが、天保七年になると更にひどい事態になった。この年は春が寒く、雨が続き、洪水が各地で起り、白米が百文で二合というまでになった。阪は、全国の生産物の集産地であった。したがって全国のどこかで洪水がおこれまち市場の値の変動に響いてくる。米屋が米を買いしめ、役人や富豪は飢饉をよのうとしているのに、賤民は二合の米すら買えない、という事態に、大塩中斎は森鷗外もその作〈大塩平八郎〉のなかでこれと同じことを述べている。ここで彼用してみよう。

し平八郎が、人に貴賤貧富の別のあるのは自然の結果だから、成行の儘に放任が好いと、個人主義的に考へたら、暴動は起さなかつただらう。

し平八郎が、国家なり、自治団体なりにたよつて、当時の秩序を維持してゐな救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。のために謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手に帰せぬ前自治団体として幾分の発展を遂げてゐた大坂に、平八郎の手腕を揮はせる余

地があつたら、暴動は起らなかつただらう。

この二つの道が塞がつてゐたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望を達せようとした。平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である。

森鷗外のこの判断は間違っていないと思う。さらに鷗外は、中斎を「米屋こはしの雄である」とした。これもほぼ正確である。中斎は陽明学を奉じた哲学者であったが、著書には〈洗心洞劄記〉があり、その著でみるかぎり、中斎の哲学体系はそれほど鮮明ではない。ただ彼には生れながらにして具備していた公正な視線というものがあった。この視線がのちに暴動を起す原因となる。この意味で、公正な視線は無償の行為そのものである、と言ってもよい。彼は、四十歳の夏、近江国に中江藤樹の遺蹟を訪れている。藤樹はわが国における陽明学の祖である。彼は、学問における才智や博識よりも、徳を重んじ、孝を道徳の大本とした実践家であった。中斎が近江国に藤樹の遺蹟を訪うたとき、どういう心情だったのか、後世のわれわれは臆測するしかないが、おそらくは、才智よりも徳を重んじたこの先達に、中斎がなみなみならぬ関心をよせていたことは察せられる。藤樹の弟子の熊沢蕃山は、備前の池田家に仕え、のちに幕府に忌避された人だが、この陽明学者は、経済論、宗教論に具体的な説をなした。その意味で蕃山は学者であった。

ところが、中斎は学者としてとどまれなかった男であった。数え年四十五歳といったら男ざかりである。しかも家督を養子の格之進にゆずり、隠居の身である。弟子に陽明学を講じておればよい身分でありながら、何故に兵をあげたか。中斎を論じる場合、この一点を見逃してはならない。暴動の結果がどうなるかは、かつて与力を勤めてきた身にとり自明のことであった。最後は、塩詰にされた屍首を磔柱、獄門台に懸けられている。

彼は米屋こわしの雄であっても、暴動の後の具体的な政策はなにひとつ持ちあわせていなかった。当時の全国の米の石高の配分を見ると、

	単位万石	全国百分比例
徳川幕府	八〇〇	二九・二
諸大名	一九〇〇	六九・三
御料	三	〇・一
皇族と公卿	四・七	〇・二
社寺	三〇	一・二
計	二七三七・七	一〇〇

となっており、一与力出身の陽明学者が、この配分をつき崩せるはずもなかった。彼は役人を経験してきて、政治のちからを知っていた。しかし、飢饉にさいし、役人、富豪と賤民の差を見すごせなかった。このときの彼の怒りは、単純率直であった。怒りが政治のちからにまともにぶつかって行ったのである。そして暴動というかたちに持ちこんで行った。具体的な政策は持ちあわせていなかったにしろ、結果から生じるなにほどかの改革は期待していたのかも知れない。ここに彼の無償の行為がある。彼は陽明学というおのれの思想を売物にはしなかった。公正な視線に支えられた男に自己顕示欲などもあろうはずがない。いちばん大事なことは、彼が賤民を知っていたことである。

陽明学の真髄が、知る心と行なう心に二心はない、とすれば、大塩中斎は、それを実践に持ちこんで、よわい四十五にして傍観者になれない人生をまっとうした男であった。観念がさきにあり、その観念にしたがって行動をおこす、といったかたちではなく、かりに彼が陽明学徒でなかったにしても、彼は天保の飢饉に起ちあがっただろう、というのが私の考えである。

しかし、いくつかの疑問は残る。なぜまわりの者を事件にまきこんだのか。中斎門下生はいいとしても、挙兵後敗れて中斎父子がひそんだ油懸町の美吉屋という手拭地の仕入屋美吉屋五郎兵衛、その妻つねは、中斎をかくまったかどで、五郎兵衛は獄門、つねは死罪

に処せられている。この夫婦は、大塩家に出入りしていた商人だったというだけで中斎に利用された。追いつめられた暴動発起人の心情としてこれはわからなくもないが、しかし最後の一点で明確でない歩み方をしている。

傍観者になれない男の人生として、私は江戸後期の一陽明学者について簡単に述べてきたが、しからば当世における傍観者になれない男の人生とはいかなるかたちがとれるか、について考察してみたい。

勇気という言葉がある。勇気とは物に恐れない気概、あるいは勇ましい意気という意味だろう。しかし私は、いわゆる勇気ある男という表現を好まない。これはまことに俗な表現である。勇気ある男とは、私が最初に述べた、俺は男だ、と同じ意味である。まことの勇気とはなにか、私の偏見によれば、公正な視線をそなえた男こそ真に勇気ある人間である。公正にたいして弱い、という事実をまっとうするためにはどれほどの勇気が要るか、あなた方は考えたことがあるだろうか。しかし、もうすこし退って考えてみると、公正にたいして弱い、というのは、人間の良心の根本である。

ところが、これが守られていないのが世の中である。守れないのは政治性が絡んでくるからである。どんな世界に棲もうと、まったく政治性をぬきにした人生は考えられない。

したがって、ここで考えられるのは、どの程度政治性から自己を守れるか、という一事である。政治家ですら、おのれの政治を守るために政治性にたいして防禦の姿勢がとれるのである。

ところで、政治倫理の規範からの現実政治の解放を唱えたのは、ルネサンス期イタリアの政治学者マキャヴェリであった。彼は自ら政治家として動き、その経験から近世的な政治学を創りだし、国家観を打ちたてた。しかし、同時に、その権謀術数は救いようがなかった。いわゆるマキャヴェリズムの名称をうんだ先祖であった。しかし、なにもこれは政治の世界に限ったことではない。あらゆる分野でマキャヴェリズムが当然のこととして通用しているのが世の中である。このマキャヴェリズムに抵抗を感じていた青年が、としとともにマキャヴェリストに変貌して行くのもまた世の中である。

男が学校を出て大会社に勤めはじめたとする。大会社で仕事をするからには、当然そこに権力への志向があらねばならない。マキャヴェリはその著〈君主論〉のなかで、国家権力を伸長するための統治技術を論じ展開したが、これとまったく同じかたちが大企業に身をおく男にもあてはまるわけである。ましてや、枝葉のように細分化した社会の現代を生きぬくためには、マキャヴェリズムにまきこまれざるを得ない、ということも考えられる。ここが問題である。男の夢と、それにともなう出世への志向のために、これは単に技術的

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c